

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月24日現在

機関番号：33909

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04396

研究課題名(和文) 心理的デートDVの被害の認識を阻害する要因の解明

研究課題名(英文) Analysis of the factor to curtail feelings of affection towards a relationship partner from restrictive behavior.

研究代表者

笹竹 英穂 (SASATAKE, hideho)

至学館大学・健康科学部・教授

研究者番号：00319229

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：研究1：本研究は、大学生のカップルにおいて、献身的な恋愛観が、交際相手からの束縛行為に愛情を感じる程度に与える影響を検証することを目的とする。その結果、男子の場合は、献身的な恋愛観(幸せ因子)が高いほど、束縛行為に愛情を感じる程度が高いことが明らかとなった。女子の場合、献身的な恋愛観(不本意因子)が高いほど、束縛行為に愛情を感じる程度が高いことが明らかとなった。

研究2：本研究の目的は、大学生に対し、デートDVの防止講座を実施し、その束縛行為がデートDVであるか否かの判別に対して、交際相手との関係性に基づいて判別する方が、効果的であるかどうかを検証した。その結果、この仮説は支持された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

交際相手から束縛行為に従うことを求められた場合、むしろ交際相手の愛情を感じる場合がある。この場合には、束縛行為がエスカレートとして身体的あるいは性的な暴力に発展しても逃げることができない危険性がある。したがって、被害を防止するためには、交際相手からの束縛行為に対して、愛情を感じるのではなく、適切な問題意識を持つことが重要になる。本研究の結果によって、束縛行為に愛情を感じることに影響を与える要因の一部が明らかになり、デートDVの防止のために役立つことができると考えられる。

研究成果の概要(英文)：Research 1：The purpose of this study is to verify the effects of the perception of devoted love on the level of feelings of affection towards restrictive behavior. The results of an analysis using structural equation modeling show that only the perception of devoted love (happiness factor) has an effect on the level of feelings of love towards restrictive behavior in the case of males. In the case of females, only perception of devoted love (reluctance factor) has an effect on the level of feelings of affection towards restrictive behavior.

Research 2：The purposes of this research are to determine whether such restrictive behavior constitutes dating violence based on the relationship with the relationship partner and to verify whether it is possible to reduce the degree of affection experienced. Consequently, the dating violence prevention course had an effect.

研究分野：健康心理学、臨床心理学

キーワード：デートDV 心理的暴力 束縛行為

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ストーカー行為の被害の事例を調べたところ、交際相手から心理的デート DV の被害を受けている場合が多いことが見受けられた。そして被害が深刻な事例では、心理的暴力の被害を受けた時に被害の認識が乏しく、適切な対処を取ることをしなかったために、心理的暴力がエスカレートしても関係を断ち切れず、その後関係がこじれてストーカー行為に発展していることが多いことが明らかとなった。交際相手から心理的暴力を受けた場合、適切に被害の認識を持っていれば、たとえその後交際を続けても、交際関係の状況によって適切な対処を行える可能性がある。しかし被害の認識を持っていない場合には、その後心理的暴力がエスカレートしても、対処が遅れることになりやすい。したがって交際相手から心理的暴力の被害を受けた場合、交際関係を続けるか否かにかかわらず、被害の認識をもつことが重要となる。ストーカー行為などの犯罪の被害を防ぐためには、まず心理的暴力の被害の認識を適切に持つことが重要となる。そのため心理的デート DV の被害の認識を阻害する要因を明らかにする必要があると考えたことが、本研究の発端である。

2. 研究の目的

近年デート DV (交際中の男女間の身体的、心理的、性的な暴力) が社会問題となっている。その中で心理的デート DV は、スマートフォンのメールの送受信を無断で確認するなど、交際相手の行動を監視し束縛するものである。交際相手から監視され束縛されても、むしろ「それほどまでに私に愛情を持っている」と感じ、被害感を持たない場合があることが心理臨床では見受けられる。この場合、束縛の程度がエスカレートして苦痛を感じるようになっても、関係を断ち切れず、ストーカーなどの被害に発展する危険性がある。したがって被害拡大を防止するためには、まず早期の段階で被害の認識を持つことが重要である。そこで本研究は、心理的デート DV に対して被害の認識をもつことを阻害している要因は何かを明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) デート DV 防止講座 (デート DV における関係性の影響の説明) の効果検証

中部地方の県立高校 2 年生の男子 4 人、女子 151 人 (計 4 クラス) を対象に、平成 27 年 6 月および平成 28 年 6 月に授業の 1 コマ (50 分間授業) を用いてデート DV の防止講座を実施した。

実験群 1 は、平成 27 年および平成 28 年に実施された 1 クラスずつ計 2 クラス (77 人) に設定し、実験群 2 は平成 27 年および平成 28 年に実施された 1 クラスずつ計 2 クラス (72 人) に設定した。実験群 1 は後述する小講義 (デート DV における関係性の影響の説明) を受けずに事後テストを実施することになるが、実験群 2 は小講義 (デート DV における関係性の影響の説明) を受けた後に事後テストを実施することになる。この手続きにより、小講義 (デート DV における関係性の影響の説明) の効果を測定することができる。

防止講座は、笹竹 (2015) が行ったデート DV 防止講座を基本にして構成し、さらにデート DV における関係性の影響の説明を追加した。実験群 1 および 2 とともに、小講義 (事例の紹介、デート DV の定義の説明、束縛行為の説明、デート DV における関係性の影響の説明) グループ討議、事前テストおよび事後テスト、まとめによって構成されている。

(2) 束縛行為に愛情を感じることに對する献身的イメージの影響

平成 28 年 7 月に中部地方の 4 年生私立大学の学生男子 136 人、女子 166 人の計 302 人 (2 学年 197 人、3 学年 98 人、4 学年 6 人) に対して調査を実施した。このうち交際経験者は男子 118 人、女子 137 人の計 255 人であった。

調査内容は、調査対象者の属性、束縛行為に愛情を感じる程度、献身的な恋愛観である。

(3) 束縛行為に従うことを求められた場合に感じる否定的感情について

平成 29 年 7 月に中部地方の 4 年生私立大学の学生 258 人 (男子 125 人、女子 133 人) に対し調査を行った。調査内容は、調査対象者の属性 (性別、学年、交際経験の有無) 心理的暴力 (束縛行為) として、「携帯電話のメールの送受信の内容を勝手にチェックされた」など 5 項目を挙げ、これらの行為に対する受けとめ方 (束縛感、うっとうしさ、恐怖、ストレス) について、それぞれを感じる程度を 5 件法で回答を求めた。

4. 研究成果

(1) デート DV 防止講座の効果検証

高校生を対象にデート DV 防止講座を実施してその効果検証を行った。特にデート DV の定義はわかりにくい点があるため、どのような定義の説明をすれば理解されるのかに焦点を当てて、効果検証を行うこととした。実験群は、デート DV の定義としてデート DV における関係性の影響を含めて説明し、統制群はその説明を含めずに説明した。これ以外のデート DV が生じるメカニズムなどの防止講座の内容は、どちらも同じである。そして、束縛行為に愛情を感じる程度を効果の指標にして、実験群と統制群では防止講座の効果がどのように異なるかを検証した。その結果デート DV の定義としてデート DV における関係性の影響を含めて説明した方が、デート DV を適切に理解し束縛行為に対する愛情を減少させることが明らかとなった。

以上の結果を論文にまとめ投稿したが、採択されなかった。その理由として、デート DV における関係性の影響の説明について疑問が残るといったものだった。確かにデート DV における関係性の影響の説明についてはコンセンサスが取れていないため、効果があったと言ってもよいかは難しい問題であると考えられた。

(2) 束縛行為に愛情を感じることに對する献身的イメージの影響

束縛行為に従うことを求められた場合、一般的には応じることを躊躇すると考えられるが、むしろ交際相手がそこまで自分に愛情を持っているのかと感じ、喜んで従う場合が見受けられる。そのような者は、自己犠牲にしてまで交際相手に献身的に尽くそうとしているのではないかと考えられる。つまり束縛行為に愛情を感じる者とそうでない者では、献身的イメージが異なる可能性が考えられる。

そこで、束縛行為に愛情を感じる程度には献身的イメージがどのように影響を与えているのかどうかを明らかにすることを研究目的とした。

献身的イメージを測定する尺度を作成するために、大学生男女約 300 人を対象に、恋愛における献身について、どのようなイメージを持っているかについて自由記述式の調査を行った。分析方法は、自由記述の回答結果に対してテキストマイニングを用いて 01 型データに変換し、さらにコレスポネンス分析を行った。その結果、忍耐的受け入れ因子、ストレス因子、積極的努力因子の 3 項目が抽出された。そこで束縛行為に従うことを求められた場合に愛情を感じる程度に對して、この 3 項目どの程度影響を与えているかを、構造方程式モデリングを用いて調べた。

その結果、男女とも、忍耐的受け入れ因子が最も強く影響を与えていることが示された。つまり恋愛における献身とは、我慢して相手の要求に従うことだなどと思っている者ほど、束縛行為に愛情を感じる程度が強くなることが示された。また男子の場合、ストレスは束縛行為に愛情を感じる程度に對してマイナスの影響を与えていることが示された。つまり男子の場合、束縛行為に従うことがストレスではないと感じるほど、束縛行為に愛情を感じる程度が大きくなることが明らかとなった。

以上の結果を論文にまとめ投稿したが、採択されなかったため、現在修正を行っている。

(3) 束縛行為に従うことを求められた場合に感じる否定的感情について

交際相手から束縛行為に従うことを求められた場合、一般的には「怖い」「自由が制限される」などの否定的感情が生起すると考えられる。この場合には、自分に対する交際相手の愛情に疑念を持ち、恋愛関係が悪化することもある。

それでは、束縛行為に従うことを求められた場合に、むしろ「そこまで私に愛情を持っているのか」などと感じ、逆に交際相手の自分に対する愛情を感じる者は、このような否定的感情は生起しないのであろうか。

このような問題意識に基づいて、束縛行為に従うことを求められた場合に生起する否定的感情と、束縛行為に對する愛情の程度との関係を明らかにすることを目的とすることにした。

研究方法としては、否定的感情についての調査項目を作成するために、まず束縛行為に従うことを求められた場合、どのような否定的感情が生起するかについて自由記述で回答を求めた。その後テキストマイニングを用いて 01 型データに変換し、さらにコレスポネンス分析を行った。その結果、不安、怒り・恐怖、面倒、信用されていない、自由の制限の 5 項目が抽出された。そこで束縛行為に従うことを求められた場合に、この 5 項目の否定的感情がどの程度生起するかについて 5 段階で回答を求めた。

分析方法は、束縛行為に愛情を感じる程度を従属変数、各 5 項目の否定的感情の程度を独立変数として回帰分析を行った。

その結果、男女とも束縛行為に愛情を感じる程度に有意にマイナスの影響を与えているのは、面倒因子であることが明らかとなった。つまり、男女とも束縛行為に従うことを求められた場合、面倒であると感じないほど、束縛行為に愛情を感じることを示された。なお男子の場合、信用されていないという因子も、束縛行為に愛情を感じる程度に有意にマイナスの影響を与えていることが明らかとなった。つまり、男子の場合、束縛行為に従うことを求められた場合、信用されていないと感じないほど、束縛行為に愛情を感じることを示された。

以上の研究結果は、論文にまとめ投稿する予定である。

5. 主な発表論文等

[学会発表](計 5 件)

笹竹英穂、束縛行為に愛情を感じることに對するモデルの構築 - 被害者はデート DV の束縛行為に對してなぜ愛情を感じるのか -、日本心理臨床学会、2018

笹竹英穂、デート DV (心理的暴力) の防止講座の効果検証 - 主体的な行動の選択に焦点を当てて -、日本心理臨床学会、2017

笹竹英穂、恋愛における「献身」のイメージの分析 - 被害者は心理的デート DV の束縛行為に對してなぜ許容的態度をとるのか -、日本心理臨床学会、2017

笹竹英穂、交際相手からの心理的暴力(束縛行為)に對する被害の受けとめ方 定義の理解

の重要性、日本カウンセリング学会、2016

笹竹英穂、高校生対象の心理的デートDV防止講座の効果の検証 定義の理解の重要性、
日本カウンセリング学会、2016

〔図書〕(計1件)

笹竹英穂、丸善、学校における防犯教育(犯罪心理学事典 日本犯罪心理学会編集)、2016、
840